

令和元年度 第3回 山口県文書館資料小展示

徳山毛利家文庫「木箱別置文書」 その1

平成31年3月、未整理であった徳山毛利家文庫の内、木箱などに収められていた文書を「木箱別置文書」と名付けて公開することとなりました。

今回公開した「木箱別置文書」は24箱あり、1,467点の資料があります。年代は、判明する限りで、万治期(1658～60)から明治33年(1900)となっています。

大きなまとまりのあるものとしては、藩の断絶以前の資料や、再興前後の資料(「木箱別置」1～9)、徳山藩主が幕府の命を受けて行った、江戸下向公家衆に対する饗応関係資料(「同」10～11)、明治33年8月に東京で亡くなった徳山毛利家10代の毛利元功(もといさ)の逝去関係資料(「同」24)などがあります。

そこで今年度、2回にわたって「木箱別置文書」を紹介したいと思います。今回はその中核のひとつを占める、徳山藩の再興に関する資料についてです。

〔徳山藩略史〕

徳山藩は、元和3年(1617)、萩藩初代藩主・毛利秀就が弟の就隆に3万石を分知(領地の一部を分け与えること)したことに始まり、寛永11年(1634)に幕府の公認を得て成立した、萩藩の支藩です。当初は下松に居を構えましたが、慶安元年(1648)、徳山(はじめ野上と称す、現周南市)に移転しました。

3代藩主・毛利元次の治世であった正徳6年(1716)、本藩である萩藩との諍いが幕府をも巻き込む騒動に発展し、徳山藩は改易、所領は萩藩へ編入、元次は遠く出羽国新庄藩(現山形県新庄市)へお預けの身となりました。

享保4年(1719)、元次の子・元堯(もとたか)に旧領・徳山での御家再興が認められ、それ以降、明治4年(1871)に山口藩へ合併されるまで存続しました。

【資料1】毛利吉元書状 享保4年(1719)6月1日

徳山毛利家文庫 「木箱別置」6-5(6の1)

幕府が徳山藩の再興を認めたことから、萩藩5代藩主・毛利吉元は、萩に預けられていた毛利百次郎(徳山藩3代藩主・元次の子。後の元堯)に3万石の分知と、徳山居住を伝えています。この後、徳山藩に引き渡す所領の確定、萩藩に編入されていた旧徳山藩士の再分離など、藩再興の手続きが始まります。

ちなみに今年は、徳山藩再興400年にあたります。

《展示期間:6月1日(土)～6月9日(日)》

【資料2】奉願候覚 元禄3年(1690)5月18日

徳山毛利家文庫 「木箱別置」2-35

元禄3年、江戸に参勤した徳山藩2代藩主・毛利元賢(もとかた)は体調を大きく崩します。快復が見込めないことから、弟の「永井主計」(後の元次)を養子として迎え、家督相続を願います。3代藩主・元次の誕生です。

元賢は3日後の5月21日、21歳の若さでこの世を去りました。

《展示期間:6月11日(火)～6月19日(水)》

【資料3】江戸幕府老中連署奉書 享保4年(1719)9月14日

徳山毛利家文庫 「木箱別置」2-30

御家再興を許された百次郎(元堯)は、江戸へ出府します。そのお礼言上のため將軍へのお目見えを願い出て、それに対して幕府老中から登城命令が届きました。それが本資料です。

いよいよ再興・徳山藩のスタートです。

《展示期間:6月11日(火)～6月19日(水)》

【資料4】覚 享保4年(1719)12月

徳山毛利家文庫 「木箱別置」6-1

徳山藩の再興により、分知分の検地帳を萩藩が徳山藩へ引き渡したことを証する文書です。【資料1】の文中で萩藩主・毛利吉元は、村分については後で通知すると言っていました。これにより徳山藩領が確定することとなります。

この時引き渡された「打渡帳」は、現在、徳山毛利家文庫「打渡帳」として公開しています(徳山毛利家文庫「打渡帳」1～77。写を含む)。

《展示期間:6月20日(木)～6月27日(木)》

【資料5】覚 享保4年(1719)12月

徳山毛利家文庫 「木箱別置」6-5(6の3)

【資料4】に対する、徳山藩から打渡帳の受領を記した文書の控です。

《展示期間:6月20日(木)～6月27日(木)》